

『オデュッセイア』21巻の弓競技に おけるテーレマコス

安村典子

『オデュッセイア』には多くの民話的要素がみられる。特に、物語の根幹をなす民話のモチーフとして、「帰国者のモチーフ」と「弓競技による婿選びのモチーフ」が用いられ、また「テーレマコス物語」においては「父親探しのモチーフ」、あるいは「父親援助のモチーフ」が用いられていることは、従来の研究によりすでに指摘されているとおりである。

「帰国者のモチーフ」と「弓競技による婿選びのモチーフ」においては、必ずしも主人公の息子が関わることを必要としない。事実、冒険物語の中でオデュッセウスが故郷を偲ぶときに思い浮かべるのは妻ペーネロペイアのことであり、成長をとげているはずの息子に会いたいとの言及はない⁽¹⁾。また、弓競技とそれに続く求婚者殺戮においても、テーレマコスが父を助けるとはいえ、オデュッセウスは基本的に復讐は自分ひとりの問題ととらえており、復讐前夜にもその手段などについて、ひとりで思案している(20.5-6)。これらの点からみても、「帰国者のモチーフ」と「弓競技による婿選びのモチーフ」が、息子の存在を前提としないことは明らかである。

したがって『オデュッセイア』の叙事詩を作成するにあたり、詩人は息子テーレマコスをもどのように取り扱い、この2つのモチーフに、テーレマコスをもどのように関わらせるかという点に特に配慮したはずであり、そこに詩人の創意工夫があったと考えられる。従来「テーレマコス物語」に用いられているのは、「父親探し」や「父親援助」のモチーフであると考えられてきた。しかしながら、そこに用いられているのは、これらのモチーフだけであろうか。

21巻の弓競技の場面では、テーレマコスは重要な役割を果たしている。これは『オデュッセイア』後半の山場であり、きわめて興味深い場面であると同時に、また多くの難問をも含んでいる。しかし本論考ではこれらの問題の中で2つの問いに焦点をあてて考察したい。一つは、なぜテーレマコスが弓競技に参加したのかという問題、もう一つは、21.113-7行の、テーレマコスの言葉の真意は何か、という問題である。この2つの問題の背景には、「父と子をめ

ぐる相克のモチーフ」があるのではないか、そして『オデュッセイア』詩人はこのモチーフを利用し、それを自らの目的に適合するように整形し直して、この叙事詩の中に組み込んだのではないかと考えられる。以上のことを考察することが本論考の目的である。

I

まず第1の問題、なぜテーレマコスが最初に弓を試みたのか、という問題について考えたい。この問題は、「婿選び」の筋から考えると、うまく説明をつけることができない。弓競技はいうまでもなく、ペーネロペイアの「婿選び」の手段として位置づけられているから、ペーネロペイアの息子であるテーレマコスは、その挑戦者としては最も遠い存在のはずである。また、たとえテーレマコスが弓を試す場面がなくても、物語の筋は支障なく進行したはずである。テーレマコスが弓を試した理由として、従来の説明の中には以下のようなものがある。すなわちオデュッセウスの弓を前にしてためらいをみせる求婚者たちに対して、テーレマコスがまず弓を試みて、求婚者たちが彼の後に続くことを促すため、という解釈である。しかしながら、弓が眼前に置かれたとき、求婚者のひとりであるアンティノオスは「この磨かれた弓を張るのはたやすいことではない」(21.91-2)とってはいるものの、「彼はこう言ったが、心の中では、弦を張り、斧を射抜きたいと望んでいた」とも述べており(21.96-7)、ここにはアンティノオスの強い意欲がうかがわれる。少なくともテキストから判断する限りでは、テーレマコスがまず試みなければ誰も弓競技に参加しないほど、求婚者たちが臆病になっていたわけではないと思われる。このように、テーレマコスの弓競技への参加は、従来の解釈では十分説明のつけられない部分があるように思われる。

そもそも求婚者たちが弓競技に参加することの目的は、ペーネロペイアの獲得と同時に、イタケーの王位篡奪をも意味したであろう⁽²⁾。したがって、これにテーレマコスが参加することは、あたかもテーレマコスがイタケーの王位継承の候補者のひとりとして、名のりを上げているかのような展開である。しかしながら父の帰還をすでに知っているテーレマコスが、このようなことを意図しているはずはない。それでは、テーレマコスが弓競技に参加するという筋の展開は何を意味しているのか、ここにおける『オデュッセイア』詩人の意図は何であったのだろうか。それは、詩人が描こうとしたテーレマコス像と、密接な繋がりがあるように思われる。

テーレマコスを描く際の詩人の基本的な構想は、父との比較における息子の姿であった。つまり未熟な息子が旅などの試練を経て、父のような優れた英雄になる、という話のパターンである。すなわち、詩人はテーレマコスの第一義的なアイデンティティーを、「父と似ている若者」として提示している。

1巻から4巻までのいわゆる「テーレマコス物語」においては、テーレマコスがオデュッセウスとよく似ていることが、登場人物によって次々と語られ、強調されている。メンテースに扮したアテーネーは、テーレマコスの頭の形と眼が父と似ているといい(1.208-9)、ネストールは話し方が(3.124)、ヘレネーは顔が(4.141-4)、メネラーオスは足、手、眼、頭の形、髪の毛が(4.148-50)似ていると指摘する。

このように『オデュッセイア』の冒頭部分では、テーレマコスが出会う人々すべてによって、姿形、すなわち外形が父と似ていることが指摘されている。それはこの段階において、テーレマコスは求婚者に対して何ひとつ行動をおこすことができず、手をこまねいてみているだけの青年であったから、英雄としての内実、力量はまだ乏しく、その点では父と全く似ていない。したがって、外形が父と似ていることのみが強調される必要があったであろう。

しかしながら、力においても、テーレマコスが父と並び称される男となるはずであることが、度々示唆されている。アテーネー(メンテース)とネストールは、テーレマコスが求婚者を征伐する可能性があると語っている。すなわちアテーネーは「あなたの館にいる求婚者たちに対して、はかりごとを用いるか、あるいは公明正大に戦うか、どのようにして彼らを殺そうとするのか考えなさい」(1.294-6)とテーレマコスに語る。さらにアテーネーは仇討ちにより勇名を馳せたオレステースの例をあげて、テーレマコスもまた、オレステースのように武勇の誉れを得るようにと語り(1.298)、同様にネストールも、オレステースのように後の世の人に誉め称えられるような働きをなすようにと、励ましている(3.197-200)。テーレマコスとオレステースの対比は、すでに1巻の冒頭で、ゼウスによって暗示されている(1.29-43)。この、ゼウスによるアガ멤ムノーンの運命の提示は、通常、求婚者の殺戮を成し遂げるオデュッセウスの復讐のひな形として受け取られることが多い。しかしながら「オレステースが成人した時には、アガ멤ムノーンの仇をうつことになるだろう(とアイギストスに警告しておいた)」(1.40-1)とゼウスが語るとおり、ゼウスの言葉の強調点はむしろ、オレステースになぞらえたテーレマコスの成長であると考えられる。すなわち父と同等の力量を身につけ、父に代わって仇を討つことのできる

英雄像が、すでに1巻において提示されているのである。

このような文脈で見ると、『オデュッセイア』21巻の弓競技の場面は、テーレマコスとオデュッセウスの父子関係の最も凝縮され集約された部分として機能していることがわかる。

*καί νύ κε δὴ ῥ' ἐτάνυσσε βίη τὸ τέταρτον ἀνέλκων,
ἀλλ' Ὀδυσσεὺς ἀνένευε καὶ ἔσχεθεν ἰέμενόν περ.(21.128-9)*

さて彼が4度目に力をこめて弦を引き上げたとき、今度こそは弦を張ることができたであろう、だがオデュッセウスは顎をあげ、意気込んでいる息子をおしとどめた。

κε ἐτάνυσσε という仮定法は、もしオデュッセウスが押しとどめなければ、テーレマコスが弦を張ることに成功したであろう、ということを暗示している⁽³⁾。すなわちテーレマコスがオデュッセウスの弓の弦をつがえ、弓を引くことが出来るということは、彼が父と等しい力をもつ英雄になったということの、最も明白な証明である。叙事詩の冒頭部分、1巻と3巻で示唆されていた、父と同じような力量をもつ英雄となる、という期待の実現としてこの場面が機能していると考えられる。すなわち「父と似ている息子」として提示されたテーレマコスは、弓競技に参加し、父の弓の弦を張ることによって、そのアイデンティティーが真の意味で完成されたといえるのである。

『オデュッセイア』には、きわめて魅力的で、そして多分に民話的な要素が残るいくつかのアナグノーリシスが用意されていることは、周知のとおりである。しかし、テーレマコスに対してだけはこのようなアナグノーリシスが提供されず、オデュッセウスが父であるという言葉で、テーレマコスがそのまま信ずることになっている(16.202-14)。乳母のエウリュクレイア、豚飼いのエウマイオス、牛飼いのピロイティオス、それに父ラーエルテースにも(果樹園の樹木とともに)、猪による腿の傷跡が示され、妻ペーネロペイアには寝台の秘密がアナグノーリシスの徴となっている。これらは「帰国者のモチーフ」と「婿選びのモチーフ」に属するアナグノーリシスであったであろう。テーレマコスはこのいずれのモチーフにも属さない物語であるから、父と子の確認に関してこれらとは別の話を詩人は考え出す必要があったと思われる。テーレマコスが父と同じ力を見せるということは、本来のアナグノーリシス、つまりオデ

ユッセウスの側から、そのアイデンティティーの動かぬ証拠を見せる、ということとは明らかに異なる。しかし他方、オデュッセウスの大弓を張れるということほど、父と子の関係を明確につなぐものは他にないであろう。テーレマコスがかつて、「母はわたしが彼(オデュッセウス)の子であると言っていますが、私にはわかりません」(1.215-6)と語るような青年であった⁽⁴⁾。しかしここで父の弓を張ることにより、テーレマコスは明確にオデュッセウスの息子であることを自覚したといえよう。そしてそのことを、オデュッセウスも顎の合図によって了解したのである。すなわちテーレマコスが弓競技に参加したことにより、彼が真に「父と等しい力をもつ息子」であることが示され、父子間の関係性が明確に確認されたのである。しかしテーレマコスの弓競技への参加は、オデュッセウスの送った密かな合図にテーレマコスが従うことによって、突然に終結した。つまりテーレマコスが父と同じ力をもつ英雄に成長したことを、その場の誰もが気づかない仕方で、密かに、ふたりだけが確認し合って終わったのである⁽⁵⁾。

先に述べたとおり、弓競技は婿選びのためであると同時に、王位篡奪の意味もあったとすると、この弓競技にテーレマコスが参加することは、父に代わって王位を獲得する目的があったかのような展開である。テーレマコスの弓競技への参加というこの話の背景には、したがって、「強い息子が父を打倒する」という「父と子の相克のモチーフ」が垣間見られると考えられる。しかしながら『オデュッセイア』詩人はテーレマコスを弓競技に参加させることにより、このモチーフを利用しながら、そこに全く逆の動機づけを行ったのではないだろうか。すなわち「父を倒し王位を得る」というモチーフを逆転させて、父と等しい力を身につけ、父を補助しうる息子の姿を、弓競技の場で示したのではないか。このようにして詩人は、弓競技への参加という予想外の仕方で、「父と似ている息子」という自らのテーレマコス像を完成させ、見事に提示したのである。

II

次に、弓競技に参加する理由として、テーレマコス自身が語っている言葉について考えてみたい。テーレマコスは次のように語っている。

*καὶ δὲ κεν αὐτὸς ἐγὼ τοῦ τόξου πειρησαίμην·
εἰ δὲ κεν ἐντανύσω διοϊστεύσω τε σιδήρου,*

οὐ κέ μοι ἀχνομένω τάδε δώματα πότνια μήτηρ
 λείποι ἄμ' ἄλλω ἰοῦσ', ὅτ' ἐγὼ κατόπισθε λιποίμην
 οἴός τ' ἤδη πατρὸς ἀέθλια κάλ' ἀνελέσθαι (21.113-7)

わたし自身もこの弓を試みてみたいと思っている。もしわたしが弓を張り、斧を射通すことができれば、たとえ母が他の男に随って家を出て行っても、後に残るわたしが今はもう父の見事な武器を取る力があると判って、わたしも悲しまずに済もうから(松平千秋訳)。

この文章は、ギリシア語として非常に難解で、彼の言わんとするところは必ずしも明確ではない。この文章の中で最も大きな問題は、115行の *οὐ* をどこにつなげるかということと、117行の *ἀέθλια* という言葉の意味である。

まず、115行の *οὐ* が何を否定しているのかという問題について、2種類の理解が可能となることは、スタンフォード⁽⁶⁾、フェルナンデス・ガリアーノ⁽⁷⁾によるコメンタリーでも指摘されている。すなわち、まず同じ115行の *μοι ἀχνομένω* につなげると、「もし母君が他の男と共に去り、この館を出て行くことになっても、残された私は悲しむことはないでしょう、後に残っても私はもう父の見事な *ἀέθλια* を取ることができるのですから」となる。つまり、父と同様の力があることが証明できれば、ペーネロペイアが館を去っても構わない(悲しくない)、という意味となる。上記の松平訳も、この解釈をとっている。

あるいは *οὐ* が116行、行頭の *λείποι* を否定していると考え、「母君が他の男と共にこの館を去って私を悲しませるようなことはないでしょう、私が後に残って父の見事な *ἀέθλια* を取ることができるかぎりには」と解釈することもできる。

前者の説をとる場合、オデュッセウスがすでに帰国していることを知っているテーレマコスにとっては、ペーネロペイアが館を去ることを想定しているはずがないが、求婚者たちを欺くために、故意にこのような偽りの言葉を発している、と考えられる。しかしこの解釈を認めることができないのは、この文章の中で使われている、117行の *ἀέθλια* という言葉の意味が問題になるからである。

先に述べた松平訳ではこの語を「武器」としており、これは一般的には「弓」と理解されていると思う。しかしながら、この語は本当に「弓」を意味しているのだろうか。

$\alpha\epsilon\theta\lambda\omicron\nu$ (形容詞中性形 $\alpha\epsilon\theta\lambda\iota\omicron\nu$, 複数 $\alpha\epsilon\theta\lambda\iota\alpha$)という言葉は, ホメーロスにおいては基本的に, (1)競技などによって獲得される賞品, (2)競技そのもの, の意味に用いられている⁽⁸⁾.

73行では $\alpha\epsilon\theta\lambda\omicron\nu$ は「競技の賞品」との意味で用いられている。ペーネロペイアは「さあ, 求婚者の皆様方, この競技の賞品($\alpha\epsilon\theta\lambda\omicron\nu$)はあなたがたがご覧のとおりです。私は神のようなオデュッセウスの大弓をここに置きましょう」(21.73-4)と語っている。すなわちペーネロペイアは, 賞品($\alpha\epsilon\theta\lambda\omicron\nu$)は紛れもなく自分である, つまり, 今, あなた方の面前に現れたこの私を獲得するために, さあ弓競技をして下さいと促しているのである。

このペーネロペイアの言葉に呼応して, テーレマコスも 106行において, 「この賞品($\alpha\epsilon\theta\lambda\omicron\nu$)が示されたからには, さあどうぞ」と, 競技の開始を促し, $\alpha\epsilon\theta\lambda\omicron\nu$ がペーネロペイアであることを確認している。

では, 117行の $\alpha\epsilon\theta\lambda\iota\alpha$ は, 何を意味するだろうか。研究者の意見は分かれており, スタンフォード⁽⁹⁾, メリー⁽¹⁰⁾, ピエロー⁽¹¹⁾, ベラルール⁽¹²⁾は「競技」ととり, フェルナンデス・ガリアーノ⁽¹³⁾は「競技の賞品」としている。またスタンフォードは, 「競技の道具」とする説があることを, その説の提唱者の名前を挙げずに紹介している⁽¹⁴⁾。このように説が分かれるのは, とりもなおさず, この $\alpha\epsilon\theta\lambda\iota\alpha$ の意味するところが非常に不可解である証であろう。しかし多くの解釈が, この語を「弓」と考えていないことは, 特に注目しなければならない⁽¹⁵⁾。とりわけフェルナンデス・ガリアーノが指摘するとおり, 『イーリアス』23.736と823において, 当該箇所と同様 $\alpha\nu\epsilon\lambda\epsilon\sigma\theta\alpha\iota$ という動詞と共に $\alpha\epsilon\theta\lambda\iota\alpha$ が用いられており($\alpha\epsilon\theta\lambda\iota\alpha\dots\alpha\nu\epsilon\lambda\omicron\nu\tau\epsilon\varsigma$, 23.736; $\alpha\epsilon\theta\lambda\iota\alpha\dots\alpha\nu\epsilon\lambda\epsilon\sigma\theta\alpha\iota$, 23.823), このいずれの場合も $\alpha\epsilon\theta\lambda\iota\alpha$ は「賞品」を意味している。このことから, 117行の $\alpha\epsilon\theta\lambda\iota\alpha$ も「賞品」を意味し, テーレマコスが弓競技に参加した目的は, 「賞品を得ること」であると考えるのが妥当であろう。

117行においては, 単数の $\alpha\epsilon\theta\lambda\omicron\nu$ ではなく, $\alpha\epsilon\theta\lambda\iota\alpha$ と, 形容詞中性の複数形に置き換えられている。これは韻律のためとも考えられるが, あるいはまた, この中性複数形はペーネロペイアだけをさすのではなく, 父から受け継ぐべき見事な賞品, すなわちペーネロペイアとその背景にあるイタケーの王国, と理解することもできるであろう。

もしそうであれば, 先に述べた二つの解釈のうち, 第1の解釈は $\alpha\epsilon\theta\lambda\iota\alpha$ の一部をなすペーネロペイアが館から出て行くことになるので, 話の趣旨として矛盾しており, 成立しなくなる。したがって115-7行は第2の解釈をとり,

「母君が他の男と共にこの館を去って私を悲しませるようなことはないでしょう、私が後に残って父の見事な賞品、ペーネロペイアとこの国を獲得することができるかぎりには」という意味となるであろう。この言葉を字義どおりにとれば、テーレマコスが弓競技に参加したのは、父に代わって、その妻と王国を我がものとする、と言っていることになる。すなわち弓競技の行われた目的は婚選びと同時に王位継承の争いでもあり、テーレマコスは王位継承の候補者として名のりをあげた、という意味になろう。

このテーレマコスの言葉は、強い息子が父を倒して王国を我がものとする、というオイディプスの話の原型を思い起こさせる。したがって第I章で述べたのと同様、このテーレマコスの言葉にも、父と子をめぐる緊張関係のモチーフが介在していると考えられる。しかしながらテーレマコスが、やはり第I章で述べたのと同様、父の顎の合図に従うことにより、この父と子の緊張関係は瞬時にして収束するのである。

テーレマコスのこの言葉は、先にも述べたとおり非常に難解で、様々な解釈の可能性を含んでいる。テーレマコスが求婚者を欺くために語ったのだとしても、その真意はわからない。しかしいずれにせよ『オデュッセイア』詩人は、あたかもテーレマコスが父に代わって王位を継承する意志があるかのような言葉を彼に語らせ、その上で、父と子の間に明確な意思の疎通が成立したことを示しているのである。このような含みのある、曖昧な用語を敢えて使うことにより、詩人は「父と子の相克のモチーフ」を密かに暗示しつつ、オデュッセウスとテーレマコスの一瞬の緊張関係を演出したのではないだろうか。

以上のように、第I章で述べたような、テーレマコスがまず弓を試したという意外な筋の展開、またこの第II章で述べたような115から117行のテキストの不可解な言い回しは、その背景に、「父より強く、父を打倒する息子」のモチーフがあり、この弓競技の場面にそのモチーフの片鱗が垣間見られるのではないかと考えられる。

III

次に、オデュッセウスとテーレマコスの父子関係にとって、いわば異質とも見られるような「父と子の相克のモチーフ」が、なぜこの叙事詩に介在したと考えられるのか、そのことを裏付ける可能性を考えてみたい。それについては以下のような理由が考えられる。

まず第1の理由は、『テーレゴニア』その他によって示されるオデュッセウ

スの死についての伝承の問題である。プロクロスによる『テーレゴニア』の梗概では、キルケーとオデュッセウスの間に生まれた息子テーレゴノスが、父を捜し求めてイタケーにやってきたとき、父とは知らずにオデュッセウスを殺したとされている⁽¹⁶⁾。すなわち、オデュッセウスは息子により、誤って殺されたのである。

『オデュッセイア』の中では11巻において、テイレシアースがオデュッセウスの死を予言している。「あなたには、海から(あるいは海から離れたところで)非常に安楽な死が訪れる」(11. 134-5). *ἐξ ἁλός* を「海から」ととれば、アイアイエーの島からやってきたテーレゴノスによる死を示しているであろうし、また「海から離れたところで」と考えれば、海洋冒険の途上ではなく、(イタケーなどを含む)陸地における死、と解釈することができよう⁽¹⁷⁾。このテイレシアースの予言は、『オデュッセイア』詩人が『テーレゴニア』に伝えられる伝承を知っていたために、テイレシアースに曖昧な形で予言を語らせた、との可能性が指摘されている⁽¹⁸⁾。

これらの資料、すなわち『テーレゴニア』、アポロドーロス、ヒュギーヌス、スコリア等は、いうまでもなく『オデュッセイア』より後に作成されたものであるから、ここに記されている物語を『オデュッセイア』詩人は全く知らなかったという可能性もないではない。しかしこのように多くの資料が一致して、息子テーレゴノスによるオデュッセウスの死を記していることから、おそらくこの話は『オデュッセイア』作成以前にあった、古い伝承とみることができるであろう。すなわちオデュッセウスが息子によって殺されたとの伝承は、『オデュッセイア』詩人も知っていたと考えてよいと思われる。

第2に、『オデュッセイア』の「ネキュイア」において、先に述べたとおりテーバイの預言者テイレシアースの亡霊が登場することから(11. 90-151), 『オデュッセイア』詩人はテーバイ伝説をよく知っていたと思われる。またオイディプース(オイディポデース)の言及が、『イーリアス』(23. 679-80)にも『オデュッセイア』(11. 271-80)にも見られることから、トロイア伝説と、テーバイ伝説が古くから交流があったことは、すでに指摘されている。したがってオデュッセウスの帰国物語が、オイディプース伝説と結び付けられて考えられた可能性は十分にあり得る。これにより、オイディプース伝説の根底をなす「父と子の相克のモチーフ」が、オデュッセウス物語に取り入れられるような素地はあったと考えられる。

第3に、テーレマコスとテーレゴノスは、その名前からみてもわかるとおり、

両者は明らかにパラレル関係にある。オデュッセウスとテーレマコスの物語を語る際に、オデュッセウスとテーレゴノスの関係、すなわち父が子によって倒される物語が投影された可能性が考えられる。

第4に、「父と子の相克のモチーフ」は、インド・ヨーロッパ世界に広く見られる話のパターンであり⁽¹⁹⁾、このモチーフに属する話の例は数多い。ギリシアでは、前述のオイディプス伝説の他、ウーラノス、クロノス、ゼウスにいたる主権交替神話においても、このモチーフが物語の根幹をなしている。また、子が父を倒す話とは逆に、父が子を討つ話もある⁽²⁰⁾。このように広く流布していたモチーフが、『オデュッセイア』詩人に影響を与えた可能性もあるであろう。

「父と子の相克のモチーフ」が、弓競技の場面に介在し得た可能性については以上のとおりであるが、もし実際にそのようなモチーフが『オデュッセイア』の弓競技の場面に用いられていたとするなら、それはなぜであり、詩人はそれによって何を意図したのだろうか。可能性の一つとして『オデュッセイア』詩人が、彼以前の伝承により伝えられていた、テーレゴノスによるオデュッセウスの死を、弓競技のテーレマコスにより密かにほのめかした(allusionを行った)、ということが言えるのではないだろうか。オデュッセウスの死に関する物語を知っていた当時の聴衆は、先に論じた21. 113-7のテーレマコスの言葉によって、いずれ息子によって殺されることになるオデュッセウスの運命を思い浮かべたかもしれない。すなわち故郷への無事の帰還を遂げ、今求婚者を殺して長年抱いていた望みを思うままに果たそうとしているオデュッセウスも、いずれは息子によって殺されることになるのを、詩人は暗示したのではないかと考えられる。

この点に関しては、テーレマコスとテーレゴノスのどちらが古い伝承であるのか、という問題が深く関わっている。両者は先にも述べたとおり、明らかに重なり合っており、ダブルのモチーフを形成しているが、両者の新旧については決めがたい。テーレゴノスの伝承の方が古い場合は、テーレゴノスによる父の死が、『オデュッセイア』において、テーレマコスと父の瞬間の危機として再現されたと言えるかもしれない。あるいはテーレマコスの方が古い場合は、『オデュッセイア』においては実現されなかったテーレマコスによる父の打倒が、テーレゴノスの父殺しとして実現されている、とも考えられる。いずれにしても、民話から叙事詩への形成という視点で考えるなら、このような仕方で父子の相克に関する「モチーフの二重化」が行われたのではないだろうか。

詩人はこのようにして、息子によるオデュッセウスの死を暗示しつつ、最終的には何を語ろうとしていたのか。それはオデュッセウスの顎の合図にテーレマコスが従ったということが象徴的に示すように、父と子の緊張関係を乗り越えた、新しい父子関係を提示することであったのかもしれない。このように、「父と子の相克のモチーフ」を用いながら、詩人はそれとは全く逆の展開に作り替え、父子関係の新たな方向性を指し示したのではないかと考えられる。

もし以上のような解釈が正しいとすれば、これによって、古来非常に難解とされてきた「2羽の鷲の飛来」(2. 146-56)のエピソードを、よく説明することができる。これはイタケーにおいて、テーレマコスが市民を集めて会議を開いた際に、彼が求婚者たちに対して決然と発言をしたときのことである。

テーレマコスがこのように言うと、それに対して遠くより鳴り轟くゼウスは、山頂の高みから2羽の鷲を飛ばせた。鷲はしばらくは風の吹くままに、互いに寄り添って翼を拡げて、飛んでいた。だが、やがて多くの言葉の飛び交う広場の中央の上空までやって来たとき、環を描いて飛びながら激しく羽を震わせ、すべての人々の頭上めがけて下降し、破滅をもたらすような目つきで、頬や顎を互いにつめで搔きむしり合った。それから、人々の家や町をかすめて、右の方向へと飛び去った。人々はこの鳥たちを目の当たりにして驚きにうたれ、これから何が起こるのかと、心に思いめぐらしていた(2. 146-56)。

仲よく飛来して、再び悠然と去ってゆくこの2羽の鷲が、オデュッセウスとテーレマコスを指しているであろうことは、多くの研究者が認めるところである。しかし他方、なぜこの2羽が傷つけ合うのかという点が説明できない、とされてきた⁽²¹⁾。互いに傷つけ合う鷲は、互いの力の強さをはかりあう父と子、言い換えれば、父の弓の弦を張ることができ、父と同等の力を持つに至ったテーレマコスとその父、それによって一瞬の緊張関係が生じた父と子の姿を象徴している、と言えないであろうか。

弓競技の場面には以上に述べたことの他にも、テーレマコスがなぜこれまでに見たこともなかった弓競技の準備をすることができたのか(21. 120-3)など、様々な不可解な要素が見られる。それはおそらくこの叙事詩の背景に、『オデュッセイア』では語られていない、弓競技にまつわる古くからの伝承が多数存在するためであろう。その、『オデュッセイア』の奥に存在する数多くの物語

の一つに、「父と子の相克のモチーフ」もあるのではないかと考えられるのである(22)。

注

(1) 5巻から12巻の冒険物語の間にテーレマコスの名前が言及されるのは、オデュッセウスの母、アンティクレイアの亡霊が語る言葉の中だけである(11. 185)。故郷を偲ぶ際に、オデュッセウス自身が自らの言葉で、テーレマコスについて語ることはない。

(2) トロイア戦争の目的はヘレネー奪還であると同時に、トロイア王国の崩壊とその富の略奪をも意図した。これと同様に、弓競技の目的もペーネロペイアの獲得と同時に、イタケー島全体の王権篡奪を意味したと考えられる。なお、オデュッセウスは自らの館の領主であると同時に、イタケー全体の王でもあった。父の亡き後にはテーレマコスがその館を引き継ぐことになるが、イタケーの王位に関しては別問題であり、必ずしも王位が自動的に息子テーレマコスに相続されるわけではなかったようである(1. 394-8)。求婚者たちも、自分たちの中からペーネロペイアの夫が選ばれた後、テーレマコスが父の館と財産を所有することを認めており、他方イタケーの王位に関しては「神々が決めること」としている。すなわち父祖の領地の相続とイタケー島の王位とが、別の問題であることを明言しているのである(1. 400-4)。

(3) この非現実の仮定法を修辭的な用法と解釈し、テーレマコスは弦を張ることができなかつた、ということ婉曲に述べているにすぎない、とする説がある。しかしそうであれば、オデュッセウスが顎を上げて合図し、テーレマコスをとどめる必要はなかつたであろう。この場面のオデュッセウスは乞食の身なりをして正体を隠しているのであるから、この密かな合図は、求婚者たちに彼の正体を見破られるかもしれないという危険を冒して、敢えて行われたものであつた。したがってこの場面では、敵たちの中で密かに行われる合図のスリルと、また、テーレマコスが弓を張ることに成功してしまうのではないかというスリル、この2重の緊迫感が鋭く交錯しているといえよう。このような見事な緊張の場面は、*κε ἐτάνωσσε* を本来の用法どおり、非現実の仮定法として理解することによって初めて、その解釈が可能となるのである。

(4) ガダマーもこのテーレマコスの発言を取り上げており、アテーネー(メンター)の言葉(2. 270-7)との関連から、アレテーほど、父子関係を証明するものはないと論じている(“Es ist nichts als seine Arete, durch die sich legitimiert, Sohn seines Vaters zu sein.” H. G. Gadamer, *Gesammelte Werke* 6, Tübingen 1985, 223)。しかしガダマーは、弓競技については何も言及していない。

(5) 『オデュッセイア』19. 479の解釈をめぐって、ペーネロペイアがこの段階で旅人の正体を夫と認めており、19. 535以降のオデュッセウスとペーネロペイアの対話は、2人が周囲の人々にそれと悟られぬよう、密かにお互いの意思を確認し合い、翌日の弓競技の作戦を整えた、とのきわめて興味深い解釈が久保氏によって示されている(久保正彰『「オデュッセイア」伝統と叙事詩』岩波書店、1983、191-205)。21巻のオデュッセウスによる顎の合図も、敵に囲まれた中で当人同士だけがわかる仕方で確認が行われたという点で、19巻の場合と非常によく似ている。2つの相似的なエ

ピソードが19巻と21巻の、共に緊迫した場面に配置されていることは、『オデュッセイア』後半のスリルに富む物語展開を考えるうえで、きわめて重要な点であると思われる。

(6) W. B. Stanford, *The Odyssey of Homer*, Macmillan 1967, ad loc.

(7) J. Russo, M. Fernandez-Galiano, and A. Heubeck, *A Commentary on Odyssey*, Oxford 1988, vol. III, ad loc.

(8) この用法は、21巻のみならず、『オデュッセイア』全巻にわたってよく守られている。場合により、「武器」を意味することもあるが、それはあくまでも、競技の賞品としての武器である。この「賞品としての武器」の意味で用いられているのは21.62である。21.62の *ἀέθλια* は、実際には武器を示してはいるが、オデュッセウスの通常の武器はメガロンに置いてあったとみられるので(19.3-13)、タラモスに入れてあったのは、特別の、おそらくオデュッセウスがかつて何らかの競技における賞品として得た武器であろう。したがって21.62の *ἀέθλια* は「王が賞品として得た鉄や青銅の多くの品々」と解釈される。これは召使いたちが運ぶ「箱」に入っており(62)、おそらく斧を意味していたと考えられる。弓と矢筒はペーネロペイアが持っているので(59)、*ἀέθλια* は明らかに「弓」を含んでいない。

(9) Stanford, *op. cit.*, ad loc.

(10) W. Merry, *Odyssey*, vol. 2, Oxford 1887, ad loc.

(11) A. Pierron, *Odyssee*, vol. 2, Paris 1875, ad loc.

(12) V. Bérard, *L'Odyssee*, vol. 3, Paris 1925, ad loc.

(13) Russo, Fernandez-Galiano and Heubeck, *op. cit.*, ad loc.

(14) Stanford, *op. cit.*, ad loc.

(15) 21巻において、弓にはあくまでも *τόξον* という語があてられており、指示代名詞に置き換えられることすら、わずか2例(21.41(*μιν*), 403(*τοῦτο*))にすぎない。このこと、すなわち21巻だけで44回もの *τόξον* の語が使われながら、2例しか指示代名詞に置き換えられていないということをも、いかに *τόξον* という言葉が大切に扱われ、弓の重要性が強調されているかがよくわかる。このように *ἄεθλον* (*ἀέθλια*) と弓(*τόξον*) は明確に区別して用いられており、*ἄεθλον* (*ἀέθλια*) が「弓」を意味するということは考えにくい。また *τόξον* と *ἄεθλον* が同行に用いられ、「弓(*τόξον*)を試して頂きたい、そして競技(*ἄεθλον*)を終わらせよう」(21.135)や、「私たちは弓(*τόξον*)を試そう、そして競技(*ἄεθλον*)を終わらせよう」(21.180=268)のような慣用的な表現もみられる。

(16) 殺害の方法について、プロクロスは何も記していないが、ソポクレスの断片(415-20)、アポドーロス(7.36)、『オデュッセイア』11.134の古註、ヒュギーヌス(127)、その他によると、アカエイの刺の穂先のついた槍でテーレゴノスがオデュッセウスを刺し、そのアカエイの毒によりオデュッセウスは死んだ、とされている。オデュッセウスの死をめぐる伝承の詳細については、岡道男『ホメロスにおける伝統の継承と創造』創文社、1988、371-2を参照。

(17) オデュッセウスの死についてのテイレシアースの予言(11.134-7)は謎めいており、多くの議論が提起されてきた。例えば川島重成「『オデュッセイア』と海——漂流者オデュッセウスの救済をめぐる」『人文科学研究』32, 2001, 76-86。その他の様々な解釈の可能性については、A. Heubeck and A. Hoekstra, *A Commen-*

tary on Homer's Odyssey, Oxford 1990, vol. II, ad loc.

(18) 岡道男, 前掲書, 374.

(19) J. L. Lightfoot, *Parthenios of Nicaea*, Oxford 1999, 376.

(20) 父が子を討つ物語として, Sourvinou-Inwood (*'Reading' Greek Culture: Texts and Images, Rituals and Myths*, Oxford 1991, 244-84) は次のような例をあげている.

(1) ポイニクス(母の頼みにより父から妾を引き離そうとして, 父から呪いを受ける: 『イーリアス』9. 447-80); (2) ヒッポリュトス(義母パイドラの讒言により, 父に憎まれ, 祖国を追放される: エウリーピデース『ヒッポリュトス』); (3) テネース(義母ピロノメの讒言により, 父により箱に入れて海に流され, 流れ着いた島はテネドスと名付けられる: アポロドーロス『ギリシア神話』摘要3. 24-6). その他, コリュトス(トロイア王子アレクサンドロス(パリス)の前妻の息子コリュトスは, 義母ヘレネーと愛し合うようになり, 嫉妬した父により殺される: パルテニオス『恋の苦しみ』4. 34); エウリュアロス(オデュッセウスが外地でもうけた息子エウリュアロスが父を訪ねて来たとき, ペーネロペイアの差し金で父オデュッセウスが彼を殺す: パルテニオス『恋の苦しみ』3)などの話もある.

(21) 古註では, 2羽の鷲のこの行為は, 求婚者たちを傷つけ, 殺害することを意味すると記している(G. Dindorf, *Scholια Graeca in Homeri Odysseam*, Oxford 1855, ad 2. 146; 153). しかし West (A. Heubeck, S. West, and J. B. Hainsworth, *A Commentary on Homer's Odyssey I*, Oxford 1988, ad 2. 152-4) が指摘するように, その解釈のためには $\delta\rho\upsilon\psi\alpha\nu\tau\epsilon\varsigma$ (能動相) が必要であり, テキストの $\delta\rho\upsilon\psi\alpha\mu\acute{\epsilon}\nu\omega$ (中動相, *Od.* 2. 153) を説明することができない. West (*ibid.*) は『イーリアス』(2. 700; 11. 393) に見られるように, $\acute{\alpha}\mu\phi\iota\delta\rho\upsilon\phi\acute{\eta}\varsigma$ や $\acute{\alpha}\mu\phi\iota\delta\rho\upsilon\phi\omicron\iota$ の用例が reflexive で「(悲嘆により) 自らの(頬)を傷つける」を意味することから, 当該箇所も悲嘆の行為を表す, との可能性を記している. しかし同時に, 鳥たちに関して「自らの頬や首を掻きむしる」行為が悲嘆を表すといえるのか疑問であるとも記しており, 問題は解決されないままに残されている.

(22) 本稿の作成に際して, 多くの方々から口頭や電子メールにより有益なご意見を賜った. とりわけ中務哲郎氏と, 口頭発表時に司会をして頂いた川島重成氏からは, それぞれ主として第 III 章と結論部分において, 示唆に富んだ貴重なご指摘を頂いた. 厚く感謝申し上げます.

(金沢大学)